

## スコットランド留学紀行

森谷峰雄

はじめに

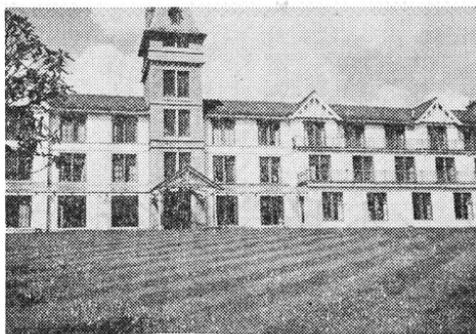
今、一日がたとえ四〇時間であっても足りないと思うほど、忙がしい。海外研修中に得た研究論文の資料を積んで、その修正に追われているのだから。まだゆっくりとした気持で『学報』に寄稿する気持にはなれない。日本の大学は成果を求めるのにせっかちすぎ。少しはそっとして欲しいものだ。しかも自分の仕事のパターンが出来上っているとき、その他の書き物をするときのやりにくさはない。本気で書こうとすると、とうてい与えられた分量では足りない。一冊の本ができるだろう。いや、実際その原稿はできているのだが。私が滞在中に得た詩想は全部、この本の中にぶちまけている。その意味で、今私書こうとするのは、しゃぶられた骨のように、面白くないだろう、と思ってむしろ、読者になってくれる人々に同情したい。

## (1) 焦熱の試験場—Dr. Fowlerの研究室

焦熱の訓練室—どうもこの一年の被指導はふりかえって、Dr. Fowlerの論文指導は火炎放射を受けたようだ。もっとも、彼の研究室には自動温度調整されて年中春の気候のようではあった。(今、この自宅の部屋こそ焦熱

地獄のように暑い)しかし、彼の心は春のように暖かくて、筆者の獨創性を削ぎ殺してしまふ、というのでなく、それを生かして歴史化する、伝統の中に組み込むようにした。このことは筆者にとって喜びそのものであった。(今日〇7月2日〇丁度Dr. Fowlerから返信があった。「お前の論文には面白いことが書いてある」と言ってくれている。)たとえば、筆者の独自の概念・言葉に新しい名称を与えてくれたことがいくつかあった。名取り、というのがあるが、筆者の経験もそれに劣らないだろう。特に嬉しかったのは、これは真実であるが、独自の考えで発展させた結果が彼の観察と一致するのを見出したことであつた。これは、大げさに言うと、カントが実践理性と理論理性の批判の一致を見出したときの心境に通じるのではないだろうか。

筆者が痛感したのは—冷汗どころか、油汗が脇から流れるのを覚えた—英語の発想と日本語の発想が根本的に異なる、ということであつた。しかし、厳密な意味で論理的な日本語構成は英語のそれと矛盾しないことも認識した。つまり、我々は言葉—母国語たる日本語をルースに使っていて日常問題を感じない



Nordrach-on-Dee, S. Maugham が T.B. の治療で過ごした病院。スコットランド、Aberdeen の西約 30 km Banchory の町を流れる Dee 川に建設されている。モーム作“Sanatorium”の映画の舞台となった。(撮影は田中一郎氏)

でいる。母国語であるが故に、頭からなめてかかっているのではないか、という反省が起る。偶々、昨年の秋の午後、一人の日本人がエディンバラのダンダス街を歩いていた。田中一郎というスウェーデン大使館商務部の人、モーム狂で、この辺りでモームの古本をあざっている、とのこと。自宅に誘い入れて語り合ったとき、このことが話題になった。日本人の社長が書いた文章を英訳してそれを

相手側の英国人に見せても、肝心な点が伝わらない。第一線で働く人の多くが直面するのが言葉の相違にひそむ発想であるという。

(この方は日本国中はもとより世界で訪れないところの方が少ない、という文字通りの国際人で多忙の身であられる。奇縁で今日 7月13日 〱拙宅を訪れて、モームの新事実を教示してくれたーモーム研究史上大きな発見だ！)

実に日本語は日常的には非論理的でも十分通用する。しかし論文になると、論理の制限を受ける。日本の学生がはじめて書く論文にはこの種の欠陥が多い。筆者が日頃から学生に授業の都度、短文章を書かせているのもその点を痛感しているからである。近頃、学生が漫画を多く読んで固い書物を読まなくなっていることも、彼らの思考力の訓練が不足する原因となつていよう。

Dr. Fowler はオックスフォードからエディンバラに移られた。六月十一日に先生から、私共夫婦が彼の自宅でお茶会ーといっても日本のいわゆるお茶会ではないーに招かれたとき、オックスフォードよりエディンバラの方がはるかによい、と言われた。彼はスコットランドをこよなく愛しておられるのだらう。

彼の学問的名声は世界の文学批評において定着している。彼の最近の大著 *The Kinds of Literature* (Harvard, 1982) によって彼がどれほど歴史に立脚しながら個性というものを尊重しているかが知られる。伝統と個性が矛盾せずに調和して彼の精神に存する。彼に *Triumphant Form* の著書があるのを知ったのはエディンバラに来てから、図書館においてであった。彼はめったに自著を口にされない。ミルトン研究においても、ミルトン伝の古典的金字塔を打ち立てたダヴィッド・マッソン (David Masson, 1822-1907) や、ハーバート・グリアーソン (Sir Herbert J.C. Grierson) ー後の大学総長ーも、エディンバラ大学の人であった。ファウラーもこの伝統の中にある人であると思った。人物批評に厳しく言う、筆者の米国の友人は、Fowler を “a marvel” と手紙で書いてよこした。一体に、英国の大学ーといっても筆者はエディンバラやケンブリッジの教授の一部しか知らないのであるがー自然科学研究者よりも人文研究者の方が人格的に優れていると見受けする。これは、どうも、批判がましくなるのだが、日本の場合と逆ではないのか。日本人の文学研究者の狭量さは筆者だけの主観的観察

ではあるまい。

Dr. Fowler はまた以前小説をてがけられた、という。詩も最近よく出版される。C. J. *Lacomb Suburb* もその一つ。都会的なセンス、ちやうたくされて輝くダイヤモンドのような硬質の詩から、抒情美を帯びた柔らかいものもある。彼についてもっと書きたいが、話題が後に控えているのでこの辺で止める。

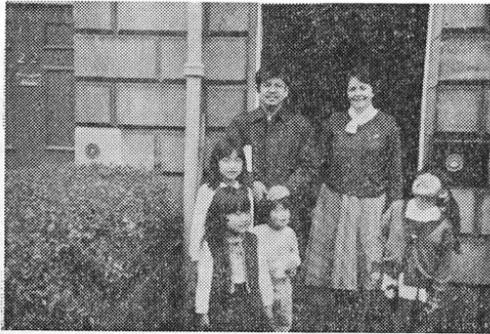
## (2) カーライルゆかりの地を訪問する

五月一日、エディンバラに着いて間もないころ、自動車で道に迷い、行き当たりばったりのドライブを続けて数分、その通りがカムリイ・バンクであることに気がついた。そして、まもなく、カーライルの新婚二年のアパートが今だに建っていて、現在バーネットさん一家の住居となっている。住みごちはいかがですか、と聞くと、二百年前の建物なので冬は大変寒いと不平をこぼしておられた。

筆者は英文学ではカーライルを特に愛好する。青春時代に読んだ『衣装哲学』は今でもその平和な静謐の心と共に想起される。特にその田園生活の一部、「晴れた夕べなどに、私は夕食（ミルクで煮たパンクズ）を持ち出

し、戸外で遠い西の山に沈んでいく太陽を見ながらおいしく夕食を食べた。」もちろん、彼の精神の神髄はこのようなロマンチックな牧歌にあるのではない。永遠の否定を通して永遠の肯定に到ったその精神こそ彼の真の精神である。カーライルは別の意味において筆者の心の支え、彼の故郷はまた筆者の心のふるさとであった。

当時筆者はベニクック (Penicuk) という



21 Comely Bank Edinburgh.

I. A. R. Barnett 夫人

カーライルが住んでいたアパートの現住の人、と共に

エディンバラから四〇キロぐらい離れた田舎の、実に快適な一近所の人々、自然環境において一所で、研究に余念なかった。それこそ、一時間も三〇分、否、五分も惜しんでいた。その頃、時に希な悪天候が二、三日続き、何かしれず心を失いかけていた。芭蕉のように漂泊に心を寄せ、思い切ってカーライルの生地、また、クレイゲンパトックを訪問する気持になった。夜十時といえどもまだ昼のように明るいスコットランド、筆者は大学の図書館でカーライルのことを調べた。James A. Froude, *Thomas Carlyle* は名文のハンから旅の心を誘う。

アナン川がハートフェルのモファットの  
上流で起こり、谷を通過して山から降り、だ  
んだんと広がり、高原地を後に残すと、ア  
ナンデルと知られる豊かなよく開墾され  
た地域にいたる。

六月四日午前八時私達一家七人は *Vaux  
Hall* *viva* 1300 で出発する。ルートはベニク  
ック—A776—A702—A74。牧場を  
なす丘原の中を進む。日本の田舎とは趣きが  
大いに異なる。ブリガー（八時二二分）、雨

の中をA74を走って九時二〇分、優雅・上品で、静かな美しい田舎町モファットにつく。Foudeのカーライル伝は記す、

カーライル夫人はまだ病んでいたもので数日後彼女の母親に連れられて転地と家事からの解放が何か彼女の役に立つかと期待してモファットあたりの丘陵を通過して旅をしていた。

美しい娘と母親が馬車に乗ってこらあたりに宿っていたのだ。それにふさわしい清潔な町であった。この美しい町からM6を通過して目的地の一つエクルフエファンに着く(十一時)。はじめてこの町を見出し出したときの心ときめきはひとしおであった(もっとも車の中で幼い五人の子供達がふざけたり、泣きわめいたりして十分にこの心境に入れなかったのは残念)。周囲は広々と開けて、まるで幼年のカーライルの時代に戻ったようだ。筆者の心のふるさとに帰ったようであった。心から尊敬している人のゆかりの地になると深く得も言われぬ甘美な気持がする。十数年も前フランスのバルビゾンを訪問したときもそうであった。この町の標語は Humiliate



Ecclefechan の教会墓地にあるトーマス・カーライルの墓

1983年6月3日撮影

ルが幼いときに遊んだ夕やけの空、田園のことが思い出されて感無量。なつかしくて立ち去り難い。

次の目的地はまことにへんびな土地、クレイゲンパトック。B725—A751—(ダムフリーズ)—A76の途中から Dunscore 方面に行く道に入る。道すがら度々人に道を尋ねてやっと、四時一五分クレイゲンパトックに着く。ここは広大な農場で現在 Armour 夫妻の所有地となっている。この付近をエマソンと二人で魂の不滅といった大問題を論じながら散歩をしたことを思う。その時の二人の姿、百年も前のことだ。この空間と時の流れを感じる。その荒涼とした高原を私も歩いた。この地からエマソンは米国に帰り、又、カーライルも大都会ロンドンに去った。筆者も詩想を魂に抱きつつエディンバラに帰った。

(質素)とある。こういった町のエートス(文人カーライルにつながっている。彼の人生のモットーは *libertas, veritas, povetas* (自由、真理、貧乏)であったという。Nancy Walker 夫人がカーライルの生家の案内をしてくれた。教会墓地に彼の墓を訪ねる。彼の妻の側にはなく肉親の一家に埋葬されている。この村の広場で昼食を取る—近くで購入したパン・牛乳・果実、その他—。カーライ

(3)ミルトン・シンポジウム、ケンブリッジ  
八月九—十二日ケンブリッジ大学、クワイ  
スト学寮で世界のミルトン学者が集まって互いに啓発し合った。筆者もこのシンポジウムに参加し意見を述べる機会を持ち、自らに大変自信を深めることになった。集まった研究

者の大半は既に筆者はその研究書によって知っていたので、何か夢が具現化した思いを持った。発表が終つて構内を散策するとき、食堂で食事を共にするときなど、また会議中に互に顔を会わせるとき、相手が高名な人であろうとなかろうと、ミルトンを通して心にある共通の理解を確認し合えた。

ここで少し出会つた学者の寸評を加えて見よう。Cambridge大学のA. Guy Leeは筆者の顔を見るなり、日本の大学が、Shakespeareのfolioを買つた、と語る。最近ではOxford大学にやられてしまふ、とケンブリッジの人文科学研究の不振を嘆いておられた。討議中に言葉を切らして少しまごついていたが、大変人物の好い老紳士であつた。Stella Reward南イリノイ大学の人、非常なギリシヤ的美人学者で夫君も立派な英語学者、この人にあつたの*The War in Heaven*を読みました、と言つても、無反応。隣の夫君がそれをくり返すと、笑顔。発表で最も感銘を受けたのはMary Radinowiczであつた。彼女の大作*Toward Samson Agonistes*から感じられる力量感を裏切らず、男性以上のエネルギーを持つてゐる。この人にI. Samuelの京都における訪問・講演について言つと、うな

ずく。これら二人の女性研究家に共通するのは知性主義である。彼女の*Samson Agonistes*の日付の論に筆者は反対であるというところを「times go against him [= Parker].」と答へる。それでも筆者の反対は変わらない。大柄で声量がありどこか女性離れしたこの学者に筆者はどことなくひかれる。最も驚いたのは学寮での食事のときであつた。隣の席にいた物静かで小柄の女性が、「私はTeinですがあなたは? それではああなたがMilton's Punctuationの研究をされた方ですね。」ハイそうです。「彼女の夫もケンブリッジの自然科学者だという。ただ、その研究は批判されたから、あの種のものを行なわない、と言われた。J. Karl Franson氏はファーミントン、マイン大学の教員、モルモン派キリスト教徒。八人の子供の父親。彼と最も親しくなつた。帰国後も多くの手紙を送つてくれる。実に学者も一人一人異なる。夫々の個性と長所と短所をもつて。」

筆者は八月十日九時から第三分科会で発表したDonnelly, "Was Milton a Baconian at Cambridge?"に対する応酬である。ドネリは当時の若いミルトンには不可能なベイコン主義―特に自然科学方法論―を持ち出して、

これがミルトンに不適切であるから、ミルトンはベイコン主義者ではないとする。しかし、これはミルトンがまだ若い文科の学生であつた事実を忘れてゐる、ミルトンも彼なりに当時のカリキュラムには不満をもつていたし、スコラステイシズムに対して反対していた、この点、ミルトンも彼なりに小さいベイコンアンといつても差しつかえない、と論じた。参加者も筆者の考えに近かつた。特に知らない老人の女性学者が筆者に「well done」と言つて握手を求められた。筆者の論はベニクックの家の中で神がひらめきの中で与えてくれたものを更にエディンバラ大学の図書館で一カ月近くも調べた成果であつたのだ。よかつた。

次に私のミルトン研究生活で最も晴れやかであつたのはミルトンが信じていた神をミルトンが礼拝したのであろうクイーンズ・カレッジ・チャペルで、ミルトンが詩文化した旧約詩篇を朗読したこと（日本語につづいて）であつた。実にここにミルトンの源泉があるのだ。筆者らはここでミルトン研究の奥の院に入つたのだ。世界各国語で朗読される詩篇を聞いていると、天国で世界の人人々と話しているやうである。

尊い喜び

罪を許された喜び

罪に死した喜び

十字架の清めにて

罪を許された喜び

ここにおいて永遠の祝福が

永遠の命が始まる

十字架の喜びを

わずかに

本当の命を覚える

この種が

天に育つように

世界の学者が今ここで

その国の言葉で

詩篇を朗読する

各民族は民族となった

何人もこれを侵すことはできない

信仰は言葉の中味

言葉は運搬役である

世界に言葉が異なる

この不思議さよ

その故に

主の救いがあっても

不思議でない

(4) マザー・テレサ『心の静けさの中で』の  
翻訳権取得

天にも上る気持というのはこのときの筆者のそれであつただろう。マザー・テレサの名前を知らない人はないだろう（今、彼女の健康がきづかわれる）。彼女はまた私達の母親なのだ。彼女はインド・カルカッタの貧民だけの母親でない。その心は生きる人々皆に必要な力を与える。多くの宗教者がいる、日本にも又。しかし、ある深い、確実な根拠からマザー・テレサの生き方を最も理想的で信頼に足るものであると筆者は考える。筆者は力弱く精神的にも又とうていテレサのようにはなれない。しかし、彼女の道にある極く小さい者にはなれる。

英国には日本より精神的に深く宗教的、良心的、道徳的に深い人々が多い。また、宗教—キリスト教関係—の本も多い。筆者はこれらの中のいくつかの翻訳権を取得し、もうすでに刊行の運びに入っているものもある。 *In the Silence of the Heart; Meditations by Mother Teresa of Calcutta* (SPCK, 1983) はその中で最も筆者を喜ばしたものである。

この翻訳権が版元から届いたとき、万歳！と両手を上げて叫んだものだ。テレサの文章の一節—

「すべての人間は神の手に由来するそして神の愛が私達にとって何であるかを知らない人はない。人がヒンズー教徒、回教徒、又はキリスト教徒であろうと、人がその生活をどのように生きるかがその人が完全に神のものであるか否かの証明となる」この文章は真に神に接する人に共通する—内村鑑三も「聖書は善人をもって『神と共に歩む者』（創世記五・二二）となせり。神を離れて偶像に仕うるは、善を去って悪を行うなり。すなわち悪を行うは真正の偶像崇拜なり。キリスト教徒にまれ、仏教徒にまれ、義を重んじ正しきを求むるものは、神の子供にしてイスラエルの世嗣たるなり」と言う。次の言葉—「あなたの家、あなたの家庭を、愛、平和、喜びそして一致が支配するもう一つのナザレにせよ、—というのは愛は家庭で始まるのですから。あなたはそこから出発し、あなたの家庭を燃える愛の中心としなければならぬ。あなたはあなたの妻、あなたの夫、あなたの子供、あなたの祖父母、あなたに関係のある人々にとって永遠の幸福の希望とならなくてはなりません

せん」。

先のミルトン・シンポジウムでインドのテ  
グラー語で詩篇を朗読した、M.V. Rama  
Sarma 教授に手紙を書いて、カルカッタの  
マザー・テレサを訪問する途中、貴大学に立  
ち寄りたいと手紙を書いたのが一月下旬。航  
空もインド経由で大阪に帰るフライトの計画  
を立てた。しかし、彼からの返事が遅かった  
ので計画をあきらめたのが三月。その直後彼  
からお前を大学のお客として受け入れるから  
安心して来なさいと言ってきた。それから又  
帰国の計画の変更をしようとしたがフライト  
の便が不便であきらめた。実は筆者は別の計  
画を立てていたが、イ・イ・戦争のために中止  
した。つまり、エディンバラからはるばると  
インドのカルカッタまで、「真の平和は神の  
御子から」と書いた車で行くとうとしていた。  
筆者が帰国の日程の計画を変えたのは以上の  
事情があった。帰国の筆者を迎えようと計画  
されていた関係職員の方々にお詫びする。

#### (5) 八木重吉英訳詩の刊行

留学中に嬉しかったことはいくつかある。  
それらは今まで書いたことも含んでいる。そ  
の他、外地生活が始まって間もない頃に受け

取った大学からの連絡便とか、また、水谷学  
長からの個人的書簡またNHK国際放送(日  
本語)は、ある種の心の不安を除いてくれ  
た。本当に有難く思った。こういったことは  
最初に書くべきであったかも知れない。

筆者は日本を離れる数年前から八木重吉の  
詩の翻訳を手がけていた。それを向うに行っ  
て多くの友人を得て、すいこうすることがで  
きた。友人の多くは教会関係の方々であっ  
た。ある意味において、一年間の筆者の留学  
生活はこの詩集の刊行の経緯に呼応する。こ  
の仕事によって多くの得難い友人を得たこと  
がその副産物としてあげられる。第一の目的  
は詩人八木重吉の信仰を英国の人々に共に分  
かち合い、キリストの御名を称え、ひいては  
両国の壊れることのない平和の礎にする、  
ことである。そして、これが御神の御旨に合  
致したので、一たび途切れそうになったこの  
企画も筆者を含むクリスチャンの人々の犠牲  
によって成功を取めた。この訳の原稿をロン  
ドン、エディンバラの出版社に出版の依頼を  
重ねること十数回、どの出版社もこの出版社  
も断ってきた。筆者は絶望しかけつつエディ  
ンバラ大学の構内を歩いていて、ふと、これ  
をなせ！ という天の声を聞いた(ようであ

った)。直ちに自宅に帰り、ふと手にした本  
を見るとエディンバラ郊外に Macdonald  
Publishers があった。事情を説明すると、こ  
の会社の社長 I. Mac Nee は協同で出版する  
のを請け合ってくれた。この人が筆者の教会  
の牧師 Victor Talaw 夫人と懇意であったこ  
とは決して偶然でなく、摂理の働きと信ず  
る。ある夜、主は私の霊に訪れて、主のいま  
すことを確かめて下さった。主は主の御旨を  
果たせうとする人を必ず助けて下さることを  
ここで書けることを幸せに思う。

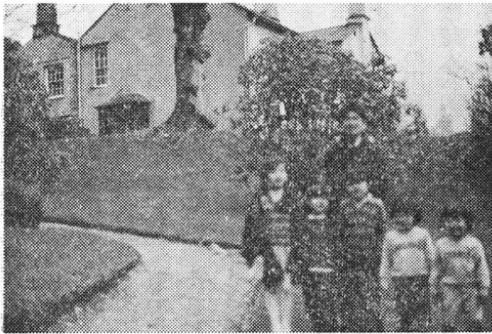
この英訳八木詩集の発刊を記念する会が教  
会で行なわれた。これらは筆者の友人 Bruce  
Steed が中心になってやってくれた。三  
月二二日午後七時半、四五名の方々が共に主  
を賛美し、八木の信仰を喜んだ。最初に牧師  
の祝辞、次に国際 P・E・N・スコットラン  
ド会長 Allan Ford、それから筆者の恩師、  
Dr. Alastair Fowler が祝いの言葉述べら  
れ、筆者が、この刊行の意義・経過を述べ、  
御礼を申し述べた。<sup>注1</sup>この会に Carlyle 研究の  
一人者 Dr. Ian Campbell もそのひょうきん  
な姿を見せて、筆者を安心させた。時節は丁  
度筆者の帰国が真近い日であったので、この  
記念会はお別れ会を大きくしたようであっ

た。尚、この訳によって、筆者が英国の作家協会会員に選ばれたのは副産物とは言え、多少文筆に関係しているので大変嬉しかった。教会の会報や国際 P・E・N ニースでもこのことを無視せずに、彼らの事業の一つとして扱ってくれた。

この刊行にはまだ後日の話が続く。筆者が帰国後、故八木重吉の夫人、吉野登美子氏が鎌倉を訪ねたとき、エディンバラ在住の、彼女の友人がこの訳を詩の図書館で読んで感激してそのことを既に手紙で知らせてあったので、吉野氏もこのことを知っておられた。全く、電光のように、波が伝わったのだ。又、これと併行して八木の詩に曲をつけた若い作曲家 S 氏にも出会うことができた。尚、面白いことに、東大阪の人がこの詩を英国の学者のところへ送った、というニュースも夫人から聞かされた。筆者はここで純粹に信仰に生きた人の魂がどれだけ人をこのように静かに力強く動かしているかを体験した。現在、この英訳詩は東南アジア・アメリカに向けて聞いかけてある。

### (6) 忘れ得ぬ人々、なつかしい思い出

筆者らの一家の最初の居住地は 283 Rullii-



湖水地方 (The Lake District) の W. Wordsworth の Rydal Mount の中庭にて  
1984年3月

on Road, Penicuik であった。近所の人々、とりわけ、子供らの遊び相手となった家庭の人々、Isla and Karen (父親は狩人で日本製のディーゼルのジープで朝早く仕事に出かけていた)、個人的なつき合いのあった、ピアニスト、Dr. Colin Kingsley, 81 Dundas Street に居住していた頃に親しくした人々、一家が暮と正月を過ごした Isle of Mull の

Anne Jones の一家の人々。カーライル協会 (The Carlyle Society)、ペンクラブ (International P.E.N. Scottish Centre) の会場で知り合った人々、Ian Campbell, A.M. Stewart 等々。皆、神を信じ人格的にも濃厚に愛のある人々、これらの人々がスコットランドの少なくとも文化の中心となる人々だ。

筆者は家族と共にスコットランドの大部分、ケンブリッジ、ロンドン、オックスフォード、ウエールズ地方等をキャンブ旅行し、英国の文化・人々の生活、自然を直接体験した。とりわけ、スコットランドの町は一つ一つ伝統があり美しく自然と町とが調和している。長年の伝統の形成は住民の郷土愛とその維持努力の結果である。——車のおかげでよく足を延ばすことができた。(えっ、お前はその車をどうしたかって?、ソ連で外交官として働こうとしている I 氏に、将来の日ソの平和を託して、そのためにのみ贈呈しましたよ。——最後に編集者にこの紙面に対して謝意を表す。

注 1、注 2、注 3、具体的資料は英文であり、また、枚数の制限によって今回は省略させていただきます。

(もりにたに みねお 文学部助教授)